



MY
ACTION

Vol. 12

再会の橋と呼びたい

指揮者 柳澤 寿男

YANAGISAWA TOSHIO



© 大岡サダム(MARS COMPANY)

PROFILE

1971年長野県出身。パリ・エコール・ノルマル音楽院オーケストラ指揮科で学ぶ。2005～07年マケドニア国立歌劇場首席指揮者、07年よりコンボフィルハーモニー交響楽団常任指揮者、09年首席指揮者に昇任。07年、西バルカン地域の民族共栄を願い、バルカン室内管弦楽団を設立した。今年11月、ニューヨーク国連本部でのコンサート、国際交流基金主催の東京公演に招へいされている。

2007年3月に初めてコンボフィルハーモニー交響楽団で客演した時のことです。「今またあの時のように紛争が始まったら、僕らは子どもに別れを告げて、楽器ではなく銃を持って戦争に行く」。ある楽団員が発した言葉に、体中に寒気のようなしびれを感じました。彼の身内は10年前、紛争に巻き込まれて亡くなっていたのです。

当時、僕はマケドニア国立歌劇場で首席指揮者を務めていましたが、旧ユーゴスラビア解体以降、西バルカン地域では各地で続いた紛争の影響で、民族間の交流が難しい地域もありました。マケドニア人の音楽家も、わずか数十キロしか離れていない隣国コンボにオーケストラがあることすら知らなかったのです。

ところが、ベートーヴェンの交響曲第7番を終えると、その楽団員は目を真っ赤にして私に駆け寄り言ったの

です。「やっぱり、音楽に国境があっはいけない」と。本当にうれしかった。それが、コンボフィルの常任指揮者へのオファーを受けるきっかけになりました。

戦後復興で停電や断水が続く中、音楽を通して、僕たちは少しずつ信頼関係を築いていきました。コンボフィルは、戦後の生き残った音楽家13人から始まったオーケストラですが、残念ながら楽団員にはアルバニア人しかいません。そこで僕は、国境や民族の壁を持たない、多民族から成る“民族共栄”のためのオーケストラ「バルカン室内管弦楽団」を立ち上げました。

そして今年5月、コンボ北部のミトロビツァで、バルカン室内管弦楽団のコンサートを開きました。ミトロビツァは、川一本を隔てて、南北にアルバニア系住民とセルビア系住民が暮らす町。そこには、“分断の橋”と呼ばれる

橋が架かっています。

「この兩岸でコンサートを実現させてい」という僕の思いは前途多難でしたが、セルビア人、アルバニア人、マケドニア人の音楽家を説得してメンバーを集め、軍隊や警察、国連などの協力を得て、ようやく実現できたのです。異なる民族同士、最初はあいさつすらままならない状況でしたが、弓を合わせ、ハーモニーを合わせているうちに、次第に心が通い合うようになっていきました。

コンサートが終わり、分断の橋の南側で、彼らはメールアドレスを交換し、再会を約束しました。「今日は本当に素晴らしい日だった」。セルビア人ヴァイオリニストのその言葉が、このコンサートが意味することのすべてを表していたような気がします。僕らぐらいはこの橋を、“再会の橋”と呼びたいものです。